
私詩言

紀本 真利亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私詩言

【Nコード】

N4398E

【作者名】

紀本 真利亜

【あらすじ】

内容は色々。不定期更新。詩では無いのも有るかも知れません。

願い（前書き）

暇な方は読んで下さい。下手な文章ですけどね。最後まで読んでくれたらこれほど嬉しい事はありません。

願い

叶うわけは無い

叶う事は無いのは解っている・・・

でも・・・

いつも願ってしまふ

頭が勝手に心がいつの間にか

救いの夢を魅させる・・・

もう一度あの時に戻れるのならば

私はあなたの腕の中でまた寝りたい

あなたの香りに包まれて

でもきつとね

その時は自然と涙が溢れてるんだ私

あなたは優しく涙をぬぐって

私の髪をいつまでもなでてくれるの

私が寝りにつくまで・・・

こんな願いはもう叶わないのは解っているよ

でもまた知らず知らずのうちに

あなたに話しかけてしまう

あなたの写真を見つめながら

また夢の中へ・・・

気がつけばまたあなたの腕の中に

ねえ今度はわたしも一緒につれてって

もう一人にはなりたくないから

今でもいいよ

もう離れたくないよ

でも夢の中のあなたは返事をしてくれない
いつも私だけが話しかけているね

私の心の中にあるのは

悲しい思い出だけ

楽しかったあの思い出達も

今となつては悲しい思い出に変わっている

幸せ過ぎたから尚更・・・

あなたを忘れられない

忘れる事が出来ないよ

どうしたらいいのかも解らないから

毎日あなたに話しかけているよ

どうして返事をしてくれないの

こんなにあなたの事を想っているのに

毎日涙を零し一人でぬぐうんだよ

誰も髪をなでてくれないよ

一人寂しく一人悲しく

一人虚しく・・・

私だけあの時からすめないよ

話たいよ

一言だけでもいいから

会いたいよ

一目だけでもいいから

触れたいよ

指先だけでもいいから

行きたいよ

あなたの世界に・・・
そは

願い（後書き）

ここまで読んでくれた方、有難う御座いました。次回作も是非お願い致します。

みえない

見えない

見えないよ

眼をあけているのに

何も見えない

私だけが見えないのかな

他の人には見えるのかな

いつから見えなくなったのだろう

小さい頃は見えていたのに

少しずつ少しずつ

私だけが見えなくなってきたのかな

こんな私を見てきつと笑う人がいるだろう

こんな私を見てきつと馬鹿にする人もいるだろう

こんな私の気持ちに何人の人が同じ気持ちになってくれるだろう

見えない

見えないよ

見えるのは暗い闇の世界だけ

いつかまた

小さい頃のように

少しずつ少しずつ

また見えてくるようになるのかな

見えない

見えないよ

他の人にはまだ見えているのかな

まだ鮮明に見えているのかな

私には見えない

私には見えないよ

この先の人間の将来も

この先の地球の未来も

私には見えない

見えるのは

暗い暗い闇の世界だけ

こんな私を見てきつと笑う人がいるだろう

こんな私を見てきつと馬鹿にする人もいるだろう

こんな私の気持ちに何人の人が同じ気持ちになってくれるだろう

おとな（前書き）

詩ではありません。めっちゃくちゃです。

おとな

今日失敗をした

他の人のせいにした

だって

怒られるのが怖かったから

だから人のせいにした

今日嘘をついたさ

自分の身を守るために

だって

自分が傷つくのイヤじゃん

嘘つくことなんて毎日だよ

悪い事？

他の人も同じ事をやってるよ

何で私だけに言うの？

不公平で差別だよそんなの

良い人ぶらないでよ

そういう事を言ってるよ

偽善者って呼ばれるよ？

そんな事言っただけは

あなたも同じ事をしたいんでしょ？

もっと気楽に素直に生きていこうよ

さっき喧嘩したんだよ

何となくムカついたから

大丈夫かって？

大丈夫だよ少し拳が痛いだけさ

えっ？相手が？

知らねえよ相手の事なんて

馬鹿じゃねえのオマエ

オメエも殴るぞ

相手の立場になって考えた事ある？

はあ？あるわけないよ

だって他人でしょ

相手の気持ちになって考えた事ある？

ああ？馬鹿かオマエ

じゃオマエはオレの気持ち解るのか？

何この人？説教してるつもり？

かなりウザインですけど

何だオマエ？友達いないだろ？

かまって欲しいのか？ガキだな

大人はいつから大人と呼ばれるの？

そもそも大人って何ですか？

おとな（後書き）

私もまだ大人ではないかも知れません。

きせつ

いつも私の前で見え隠れしていたキミ

手を伸ばしても

駆け足で追いかけても

キミに触れることが出来なかった

あの頃の私

キミの背中だけが私の眼に入る

キミを振り向かすことしか考えてなかった

雪が散つき寒かったけど

私の心だけが火照っていた

あの冬の日

いつも私の隣にずっといてくれたキミ

小指と小指を繋いで

私と一緒に歩いてくれた

幸せな頃の私

キミの横顔だけが私の眼に映る

キミの香りと肌の温もりが安心をくれたね

桜が舞って綺麗だねと

二人で笑みを浮かべていた

心地よい春

いつも私を後ろから支えてくれたキミ

ずっと私の傍にいて

同じ時間を過ごしてくれる

夢を見た私

キミとの将来を私の心に思い描く

キミという存在は私よりも大切な宝物だよ

波が運ぶ潮の香りに

二人は永遠の愛を誓った

三回目の夏

いつも周りを見渡せばいてくれたキミ

でももういない

横を見ても前を見ても後ろを見ても

キミのいない私

キミとは二歳年が離れていたけど

気が付けば私はキミと同じ年になっていたよ

葉が紅葉に染まる

キミが空に昇ってから

二回目の秋

季節は私の過去を思い出させてくれる

これから

占い 其の一

最高運

今日は良い天気

毎日同じ時間に起きて新聞をチェック

目をやる所は小さな欄

私の好きな占いのコーナー

今日の運勢は・・・

出会い運が最高みたい

こんな日は朝からテンションがあがります

新聞を見終えるとテレビもチェック

番組終わり際のコーナー

イマイチ信憑性のかける

血液型占い・・・

これもまた出会い運良し

こんな日は朝から自然と笑顔が溢れるよ

きっと私の運命の人に出会えるのかも知れない

今日こそは素敵なお日になりそう

いや してみます

いや なる筈だ

期待に胸を膨らます

今日も一日お仕事を頑張ろう

今宵は良い天気

毎日同じ時間に会社から帰宅する

結局何も無かった一日

ああああ・・・

溜め息が自然と出た

こんな夜は何気に少し車でドライブだね

そうだ

映画でも借りていこうかな

結局いつもと変わらない一日でした

明日はきっと良いことあるよ

明日こそは・・・

* 最悪運 *

今日の占いは最悪

良いところは全くありません

こんな日は占いを信じちゃダメ

気にしないようにしとけば

ほら

いつもと同じ一日の始まりだよ

嫌な事があっても流しちゃいましょう

注意された事があっても流しちゃいましょう

でもちよつと待った

指摘された所だけ頭に残しましょうね

イヤな事だけは頭から流しちゃいましょう

ほら

いつもと同じ一日だったでしょ

何事もイヤな事を受け止めていると

体がまいっちゃうからさ

なるべく溜めないように

明日の占いはどうなのかな

今日が悪かったから明日はきっと

良いはずと

占い 其の二

金運最高

今日は金運最高の日

何やらこの一年で最高に良いみたい

幸い今日はお仕事がお休み

何やら今日についてそうな予感

期待を胸に抱きながら

愛車でイザ出発

行き先はそう宝くじ売り場

夢を得るために

夢を買うために

もう車の中の私は当たった時の事を考える

きっとこの瞬間が一番わくわくする

期待を胸に抱きながら

閃いた数字を書く

あれこれ悩むが

無の心で書き上げる

そしてニヤニヤしながら家に帰るのだ

帰りの車の中でフト思う

今日買って良かったのか？

今日が当選発表の方が効力があつたのではないか？

なんて事を考えてしまうと不安になる

お馬鹿な私

結果は？

勿論の事

いつも通りの日々を送る私がいた

休日

相変わらず今日の運勢もイマイチ

最近出会いもなく仕事のストレスも溜まるばかり

こんな日は気分転換するしかないね

幸いにも今日はお仕事がお休みだしね

さあ 友人を誘ってカラオケにでも行こう

大好きな歌でも歌って気分を変えよう

たまにはお昼からお酒でも飲んでしまおう

大好きなカシスオレンジで気分転換

友人とお昼から馬鹿騒ぎをして

ストレスを吹っ飛ばす

こついつ日があっても良いものだ

自分の殻を壊す日があっても良いのだ

硬い人間にはなりたくない

甘い人間にもなりたくない

弾ける日をたまに作ろう

肩の荷を下ろそうよ

そしてまた明日から

元氣良く過ごそうよ

身勝手（前書き）

もう少してサミットです。サミットで何かが変わるのか？きっと何も変わらないと思います。でも何もしないよりはマシかも知れませんが。

身勝手

風船

風船に空気を入れた

少しずつ少しずつ大きくなったよ

まだまだ大きくなるよ

少しずつまた空気を入れたよ

また大きくなった

パンパンになったよ

最後の一吹き

バンッ

破裂しちゃった

風船はシワシワになって

元に戻らなくなった

また違う風船を膨らまそう

あれっ

もう無いや

最後の一吹きしなければ良かったな

* 綺麗事 *

人は十人十色

思考も色々 未来も色々

だから一つになることは無いんだよ

人は自分の事しか考えられないから

悲しい事だけどね

そんな事は無いって？

そんな事があるんだよ

人が多ければ多い程まとまらないんだよ

人は万人万色

人種も色々 言語も色々

言葉と頭では綺麗事を考えても

行動にはなかなか移せないんだよ

寂しい事だけどね

行動に移せるよって？

出来る人もいるかもね

でも人は周りが行動しないと出来ないから

人は利益が好きな生き物

目先の小さな事しか見ようとしな

もつと視野を広げれば良いのに

人は自分が好きな生き物

他人が困っていても知らん顔をする

だって自分さえ幸せなら良いから

人は後悔が好きな生き物

失敗してから気づき他人のせいにする

きつとまたリセットをするつもり

だから人は一つになることは無いんだよ

いつまでも次が有ると思っているのだから

人は億人億色

この文は私の綺麗事

億人一人の億色一色の

私の綺麗事にすぎない

有り溢れた甘い考え

身勝手（後書き）

チームマイナス6%。私のいる会社も実施しています。この前までは外の外灯を点ける前に閉店をしていましたが、利益が減った為か営業時間が変わりました。外灯を点ける時間まで営業。何処がチームマイナス6%なのだろう。

事実と真実（前書き）

私なりの解釈です。

事実と真実

オーパーツ

その時代にはあつてはいけないもの

その時代には似合わない意外なもの

別にあつても良いと思うけど

あつたら大変な事になるんだよ

今まで学んできた事実が覆ってしまうから

でも本当にあつたのならば

どうなるのだろう

私は真実が知りたい

この時代には今とても必要なものがある

この時代には今やるべき事が沢山ある

私はこの世界の事実ではなく

私はこの世界の真実が知りたい

でもきつと無理だね

謎だらけだから

浮気心

私には恋人がいる　優しい優しい恋人

恋人は私の事を大切に思ってくれている

恋人は私の事を本当に愛してくれている

傍から見れば幸せに見えるかも

誰もが羨む二人だと映るかもね

でもね

私の優しい恋人であることは事実なんだよ

私には好きな人がある　今は片思い中

好きな人は私の気持ちに気づいてるのかな？

恋人は私の気持ちの変化に気づいているの？

傍から見れば酷い人に見えていても

自分の気持ちには嘘はつけないよ

だから

私の気持ちはもう恋人には無いことが真実なの

ごめんね 優しい恋人

でも今はまだ付き合っている事は事実だから

まだ優しくしてね

それとね 好きな人

嘘でも私の事を好きと言ってくれるのならば

私はキミの虜だよ

例え

嘘の真実でも

私にとっては事実になりえるのだから

* 事実と真実 *

事実と真実 似ている様で似ていて

真実と事実 似ている様で似ていない

車

くるま

生まれて初めて買った 私だけの車

白くて小さな車だけど とてもお気に入り

決して安いから買ったわけじゃないよ

何処か可愛らしく 何となく惹かれた

綺麗な車

だった車

今はもうボコボコに凹んでるけど

まだまだ乗らせてね

これからガンガン乗りますから

まだまだ動いてね

走れ

踏め 踏め 私の右足

行け 行け 彼方まで

走れ 走れ 何処までも

私と共に駆け抜けよう

私と車は一心同体だから

行き先などわからない

わかってたまるものか

わからないから楽しいのだ

この道を果てしなく突き進む

曲がり道でもノーブレーキ

根性で曲がってみせろ

ぶつかっても構わないさ

人に迷惑をかけなければ

ガソリンが無くなるまで

ブレーキは踏まないんだ

ガソリンが無くなったら

一休みをすれば良いのさ

そしてまた走り出そう

* オンボロ車 *

長く乗っていたから もうボロボロだね

もう限界だよね

このボロボロのオンボロ車から

沢山運転を教わったね

沢山思い出も作つたね

沢山の愛着もあるけど

もう限界だよな

このボロボロのオンボロ車さん

キミを捨てる訳じゃないんだよ

キミは私に尽くしてくれたから

永い永いお休みを与えるんだよ

いつまでもオンボロ車さんには

頼ってられないからさ

私は次の車を探す事にするよ

ボロボロのオンボロ車さん

キミならこの気持ち分かるよね

人

それ

いつの日かそれに憧れを抱く
それは時に美しく想像し
近いようで遠くに感じた

いつの日かそれに恐怖もした
それは時に闇のようで
遠いようで近くに感じた

それは終わりなのか
それは始まりなのか
誰にもわかる筈も無い

いずれそれが訪れるのなら
自分の時間を大切にしたい
その日が来るまで

さき

明日があるという幸せ

一秒先が来るといふ喜び

それは当たり前な事なのかも知れない

だからこそ気づかないのかも知れない

もし今 悲しんでいる人がいたら

それは悲しむ事が出来るという時間があると言つ事だよ

その悲しみを忘れないで

もし今 楽しんでいる人がいたら

その笑みは辛い日を乗り切ったから自然と零れるんだよ

その楽しい時間を大切に

悩み事は時間が解決してくれるから

元気な気持ちがあれば

きつと乗り越えて行けるから

一年後の自分を想像できる喜び

明日の自分が想像出来ない怖さ

人の時間はそれぞれだけど

私はまたいつも通りの朝を迎えたい

* 人間観察 *

走っている人がいる 歩いている人もいる

仲の良さそうなカップルが歩いているね

喧嘩しているカップルもいるよ

一人寂しそうな人もいる

車を運転している人 タバコを吸っている人

暇だから本を読んでいる人もいる

携帯電話で話している人もいる

笑ってたり 泣いていたり 怒ってたり

空を眺めたり 寝ころがったり

色んな人がいる

今している事

それが生きている証拠

私情

イヌ

わんわん

なぜキミは僕の傍にいてくれるの？

その大きな瞳で何が見えているの？

わんわん

なぜキミは僕の事を信用するの？

その大きな耳で何を聞いているの？

わんわん

キミは疑う事を知らないのかい？

その大きな鼻で何を感じているの？

わんわん

僕はキミの様な純粋な心が欲しい

穢^{けが}れ無き真直で人を信じれる心を

わんわん

キミは僕の大切な家族だ

祈り

キミは祈っている

一体だれに祈っているの？

神様？ ご先祖様？ それとも天に？

そんなモノはこの世界にはいないんだよ

そんなモノにすがっても何も起きないよ

キミの声にならない祈りならば

キミ自身に祈らないとね

キミの祈りが声になるのならば

キミの周りの大切な人に届けよう

そんなモノに祈るよりはずっとマシだから

吸殻

灰皿にあるタバコの吸殻

フィルターは少し汚れている

この吸殻を何日間見てきたのだろう

でも まだ捨てきれずにいる

こんな物は「もう捨ててしまえ」

何て事は何度も思っているのに

この吸殻は「私の唯一の貴方の思い出」

何て勝手に拒んでしまう

こんな私も吸殻と同じなのかな

言葉

告白

宝石箱の様な綺麗な夜景
僕達以外誰もいない丘
君に言いたい言葉がある
『愛してる』

とってもクサイ言葉を真顔で話す貴方

輝きを解き放つ澄んだ星空
時々優しい風が吹く中
貴方に伝えたい言葉がある
『私もだよ』

ありきたりな返答をした私の頬には涙
心のこもった言葉は心を打つ

それはきっと

『生きている言葉』なのだから

同じ言葉

『さようなら』

また明日会おう
次に繋がる言葉

『さようなら』

もう会えないから
最後の掛け言葉

さようなら

さようなら

* 光と闇 *

『光』

その先には何があるのだろう
なぜ照らし続けるの？

『闇』

その中には何があるのだろう
なぜ暗闇は存在するの？

きつと光だけなら白くて何も見えないね

明るい ただそれだけ
何も見えなくてつまらない

きつと闇だけなら黒くて何も見えないね
暗い ただそれだけ
何も見えなくてつまらない

同じ空間には光と闇は共存出来ない
遮蔽物が無いと光と闇は共存は出来ない

キミの空間には小さな闇かげが沢山ある
何となく賑やかで明るいイメージ

キミの空間には大きな闇かげが一つある
何となく静かで暗いイメージ

遮蔽物の大きさで闇かげの大きさも変わる
それは場所によって様々で同じ物なんて無いんだよ

闇は光無くしては存在できない
光は闇無くしては際立たない

光と闇のバランスが大切だ

飛行機雲

短い夏の終わりに

僕の心はキミの事をふいに思い出す
未だに新しい恋もせず

一人気ままに今日まで生きてきた

もしかしたら

僕の心はキミを待っているのかな
本当の気持ちすらわからない
こんな僕はみつともないね

青い空に飛行機雲

あの雲の様に前に進む事が出来たなら
どれだけ楽になるだろう

これから一人生きていくのかな

もしかしたら

都合良くキミと再会できるかもなんて
心の何処かで思っているんだ
今のキミは元気ですか？

いつまでも女々しくお揃いのペアリングを
右手の薬指にしちゃって
何を期待しているのだろう

そんな夢みたいなさ

僕から行動もしてないくせに
叶うはずも無いんだ

だからキミに出会う事もきつと無い

もしかしたら

僕が今日まで一人いた事を

僕の心が知らず知らずのうちに

キミのせいにしていたのかも知れない

きつと僕が前に進めない事を

キミのせいにしていたんだ

こんな僕はみつともないね

情けないけど

やっと今気づいたのかも知れない

こんな僕だったからキミは去って行ったんだね

ほろ苦い思い出は心の中に閉まって

薬指の指輪なんかも捨ててしまつて

そしたら少し身軽になれたよ

短い秋の始まりに

いつか見た青い空の飛行機雲の様に

僕はゆっくり歩き出そう

新しい恋をするために

語り

* 息抜き *

人は皆

周りから良く見られたい

だから気を使う

そして

自分に疲れる

その時は

周りから浮いても良いから

たまに深呼吸

少し位

素直になろう

息抜き

息抜き

* 好きになること *

人を好きになること

相手を知ることから始まり

自分を知ってもらう

異性を好きになること

一方的な「好き」は片思い
自分を知ってもらってから
両思いになるのかも

好きになること

まずは自分のことを好きにならなければ
好きにはなれない

会いたい

会いたい
心細いから
会いたい

会いたい
喋りたいから
会いたい

会いたい
温もり欲しさに
会いたい

会いたい
笑いたいから
会いたい

会いたい

人は人に会いたい
人は皆ワガママだから
会いたいんだ

嫉妬

机の引き出しの置くから出てきた
少し古い一枚の写真
写真を手に取ると自然と動きが止まる

少し若い自分と
当時愛していた人

二人とも笑顔で映っている写真

全てを捨てた筈と思っていた思い出
そんな思い出を懐かしむ自分
当時の自分に勝てない物に気づく

「笑顔」

今の自分にこんな笑顔が出来ない

「苦笑い」

今の自分にはこれしか出来ない

写真をそつと引き出しに戻した

また暫くしたら見てみよう

負け恋

私と君を繋いでいるのは何？
触れればプツリと切れそう
吹けば何処かに飛ばされそう
そんな曖昧な関係

私はなぜ君を必要としているの？
君にとって私は一体どんな存在？

未来が見えるのなら
どれだけ楽になる事か
私の幸せってなんなんだろう

もしあの時 君に出会わなければ
こんな曖昧な関係にはならなかったのに
でも今更 そんな事を悔やんでも
仕方の無い事だから

でも君と逢えると
とっても嬉しくなるんだ
プツリと切れそうでも
何処かに飛ばされそうでも
例え 曖昧な関係でも
一緒にいられると
それでも良いと思えるんだ

願いが叶うとしたら
どれだけ楽になる事か

そんな想像に幸せを作ってしまう

もしこのまま 月日が流れて
こんな曖昧な関係が有ったんだと
笑って過ごせる日々を送れるのなら
全然良い でも今の私に出来るのは
時に身を任せる事だけ

ただ単純に君の事が好きだから
プツリと切れそうで
吹けば飛びそうな関係も
君を紡いでいるのは私の方だから
だからきつと

もしも君と出会った日に戻れたとしても
私は躊躇無く 君に会いに行くよ
例えばまた曖昧な関係になろうとも
私は会いに行く 後悔しても良いんだ

私は君の事が好きなんだから
仕方が無いんだ

好きになった方の負けだから

なんとなく

空模様

空を見上げた

透き通った綺麗な青

こういう日もあるんだ

空を見上げた

薄暗い灰色の雲

こんな日もあるんだ

空を見上げた

漆黒の闇に包まれた夜

そんな時も訪れる

空を見上げた

空から落ちてくる雨

そんな日も訪れる

まるで人間の様

たばこ

タバコに火をつけた

でもそのままにしておく

火は消えてしまう

吸わないと

火は消えてしまう

切っ掛けを作れば

火は自然と少しずつ

くすぶっていく

ずっと

少しずつ

火は進んでいく

終わりがくるまで

あの人

あの方は今元気だろうか

もうきつと二度と会うことはないのに

たまに思い出す

そんなに親しくはなかったのに

なぜかたまに思い出す

きつとあの方も私のことは忘れているだろう

いや以外と同じことを思っているのかも知れない

そんなあの方は沢山いる

その時だけ

気になる存在

人

自分から大口を叩く人は

大した事の無い

小さな人

すぐ人を褒める人は

勝手に限界を作る

自信の無い人

言いたい事も言えない人は

自分の殻に閉じこもる

利用されやすい人

人は屁理屈が好きなのかも

思い草（前書き）

黄色い小さな花。「思い草」

思い草

他の人に比べれば

正直容姿は良くはないけれど

貴方を思う気持ちは負けないよ

いつまで

私の傍にいてくれるの？

いつまで

私は貴方に傍にいれる？

甘い香りも

美しい容姿も

大きな華も無い私は

まるで「思い草」

だから

貴方は他の華のある人の所へ
いつてしまいそうで心配だよ

明日の今頃は

一緒にいられるかな？

来週の今頃も

二人でいられるかな？

部屋の窓から見える

黄色い小さな小さな花

思い草

貴方が何気に私に教えてくれた花

貴方は草なのに花が咲いているのは
可笑しいって笑っていたけど
私には心に入る大好きな花
貴方が私に教えてくれたから
それと何処か私に似ているから

甘い香りも

美しい容姿も

大きな花びらも無い花

それは思い草

もしも

私が貴方に捨てられたとしても
私は待っているから
本当に大切な貴方の為なら
何でも出来るんだ

ねえ思い草

その小さな小さな

黄色い花びらが

小さな小さな風に

小さく小さく揺れているよ

ちゃんとした花なのに

草呼ばわりされたね

ちゃんとした名前もあるのにね

オミナエシ
「女郎花」

私は女郎花に誓おう

大切な貴方の事を思う気持ちを
例え私の傍から離れても
私は貴方の事を待っているから

それと女郎花

本当の名前の事も

教えといてあげるね

いつまでも草呼ばわりでは
可哀想だから

信じてくださいね

「約束は守るから」

思い草（後書き）

思い草。別名、女郎花。花言葉は「約束は守る」。

私の思い出

＊私の思い出＊

私の心の中で

私の名前を呼ぶ声が聞こえる
君の優しい声で

周りを探してみても
君がいないのはわかっているけど
どうしても探してしまうんだ

今は私の心の中にしか
存在できない君
君と話した会話は忘れていないよ
もう増える事の無い
君との会話

思い出の中にしか君を探す事が出来ない
でも思い出に浸るだけで私は心なしか元気になれる

色褪せないでね
私の思い出
これからもずっと

晴れの日も雨の日も曇りの日も雪の日も
君と過ごした思い出よ

もう増える事が無いのだから
色褪せないでね

春の日も夏の日も秋の日も冬の日も
君と話した言葉達よ
一言も忘れたくは無いから
どうか消えないで

私の心の中が
君を必要としている間だけは
君の存在が必要なんだ

だから
私の思い出よ
どうか色褪せないでね
これからもずっと

思い出の曲

何気に流れてくる曲
どんなにテンションが高くても
どんなに会話で盛り上がっていても
その曲が流れてくると
自然と過去に振り返ってしまう
私の思い出の曲

決まって失恋した時に聞いていた

バラードの曲

悲しい歌だつて解つていたのに
何度も何度も聞いた曲

その曲のイントロが流れてくるだけで
当時を鮮明に思い出し
ちよつぱり切ない気持ちになつてしまう

そんな曲は沢山あるんだけど
どの曲もイントロだけで
当時を振り返れる

私だけの思い出の曲達

もろは

* 刃物 *

綺麗に磨がれた刃物

色々と便利な刃物

魚をさばく時

果物を切る時

とっても便利な刃物

綺麗に磨かれた刃物

人の命を助ける刃物

手術の時使う刃物

とっても便利な刃物

綺麗に磨がれた刃物

弱い人が持つと

とても強くなれる気がする刃物

人を傷つける為の刃物

生き物を殺める為の刃物

綺麗に磨かれた刃物

刃物だけでは何も出来ない刃物

使う人がいなければ何も出来ない刃物

使う人がいなければ錆びてしまう刃物

使う人がいなければ綺麗に輝けない刃物

時に人を傷つける事が正当化される時がある

時に人を傷つける事が批判される時がある
とっても便利な刃物

この世界には色んな刃物がある
この世界事態も刃物
諸刃の刃物

* 何処かへ行こう *

何処へ行こうか

寒いから南に行こうか

熱いから北に行こうか

とりあえず東にいこうか

何となく西に行ってみようか

時に気分任せでも良いんだ

時に意味が無くとも良いんだ

何処かに行こう

何処へ行こうか

一人で近場に行こうか

皆で近場に行こうか

一人で遠回りしようか

皆で遠回りしようか

時に先を読んでも良いんだ
時に意味が有っても良いんだ
何処かに行こう

意味が有っても無くても
何処かに行く事が自分の為になる
だから何処かに行こう

道

青信号

夜の少し大きな通り

全ての信号が青になると

ちよっぴりだけ幸せな気分になれる

信号が変わらないうちに

駆け抜けることが出来るのなら

目的地まで行けるのなら

私の歩む道もこの道の様に

遮る物も無く進めるのなら

どれだけ楽な事だろう

どうか点滅しないでください

少し先の信号

この綺麗な青い光の線を崩さないで

私の心地良いリズムを崩さないで

ちよっぴりだけ幸せな気分を維持させて

もう少しだけ

ドンくさい

私の前を走っている

ドンくさい車

どけてくれ

お願いだから

私の前を走っている
とろい車

左斜線を走って
後続車は渋滞だよ

私の前に入ってきた車
割り込んで来たなら
もっと加速しろよ
もっと空気読めよ

何の為の複車線だよ
遅い車は左車線だよ
後続車の流れを変えるのは危険だよ
運転に自身が無いのなら運転しないで
それこそ危ないから

私の前を走っている
ドンくさい車
どけてくれ
どうかお願いだから

パッシングに気づいて
クラクションに気づいて
ドンくさい車
あなたにしているんだよ
どうか気づいて
煽られてると思わないでね
どうか合図に気づいてください

どうして右折するのなら

もっと早くウィンカーを点灯させないの？

どうして左折するの？

中央に止まっているの？左に寄れないの？

どうして曲がるのに

そんなに逆方向に膨れて曲がるの？

どうして周りの車に気を使えないの？

私の前を走っている

ドンくさい車

どけてくれ

どうかどうかお願いだから

ドンくさくて空気の読めない

あなたのペースに合わせようとしなくて

どうかどうかどうか

お願いだから

君に送る言葉

＊君に送る言葉＊

いつも着ないタキシードなんて着て
いつもと違う髪形なんかで決めた君
思わず見た瞬間は笑ってしまっただけ
でも君の顔はいつに無く緊張して真剣な顔付き
そんな君を見ているといつの間にか
置いてけぼりを感じてしまう
この日の主役は綺麗な花嫁と親友の君

今日という日はきっと君達の為にあるんだ
君達が歩んできた歳月はこの日の為に
これからは二人一緒に同じ道を歩んでゆく
時に険しく厳しく
時に楽しく甘く
輝かしく見える未来
懐かしく思える過去

今日と言う日の為に僕から君達に
届けたい言葉があるんだ

「おめでとう」

口下手だから簡単な言葉しか思い浮かばない
僕なりの精一杯の言葉

この言葉を君達に送るよ

明日という日はきっと君達の為にあるんだ

君達がこれから歩いていく永い永い道のりは
これから始まるまた多くの思い出をつくってゆく
花嫁と二人だけの
僕から見れば
楽しく思えた過去
寂しく思える未来

親友の君が始めて見せる涙に
僕もついもらい泣きをしてしまう
もう言葉にならないから
もう声に出来ないから
心からまた

「おめでとう」

本当に良いヤツだから

「おめでとう」

幸せになつて欲しいから

「おめでとう」

頭が悪いからこんな簡単な言葉しか思いつかない
僕なりの気持ちを伝えたいから
心の中で君へ

この言葉を送るよ

「本当におめでとう」

君に送る言葉（後書き）

結婚をする親友に送る言葉。

時を刻めない時計

真夜中の暗い部屋

いつもあなたと一緒にいたのに

今は私一人

この間まで楽しく明るい部屋だったのに

今は私独り

テレビもつけないで部屋の明かりもつけないで

まだあなたの温もりがある冷たいベットに座っている

何処を見ているわけでもなく

何処を見ているかもわからない

ただ時計が進む音だけが私に入ってくる

カチッ カチッ

普段なら気づかない音なのに

私の中に刻んでゆく

カチッ カチッ

あなたの笑顔が浮かぶ

カチッ カチッ

あなたの優しい顔が浮かぶ

カチッ カチッ

あなたの怒った顔が浮かぶ

カチッ カチッ

あなたの困った顔が浮かぶ

あなたが買ってくれた小さな時計
時計は当たり前のように音をたて時を刻み続ける

ねえ どうして
ねえ どうしてこうなってしまったの

真夜中の暗い暗い部屋
いつもあなたと一緒にいたのに
今は私一人
この間まで楽しく明るい部屋だったのに
今は私独り

テレビもつけないで部屋の明かりもつけないで
今は私だけの温もりがある冷たいベットに座っている
いつのまにか暗闇にも目が慣れ
いつのまにか小さな時計を見ていた

同じ所を繰り返し秒針が進めない時計
カチッ カチッ
電池が切れ時を刻めない時計
一秒先に進めない時計

カチッ カチッ
自然と涙が零れてきた私
カチッ カチッ
自然と手を握ってしまう私

カチッ カチッ

自然と肩が震えてきた私

カチッ カチッ

電池を代えれなかった私

あなたが買ってくれた小さな時計

時計は時を刻むのを止め音だけを響き渡す

お願いだから

お願いだから時を刻んでください

カチッ カチッ

この時計があなたと重なる

カチッ カチッ

電池を代えれば時を刻むけど

カチッ カチ

電池を抜いた瞬間に……

カチ カチ

あなたの時も止まってしまいそうだから

カチ カッ

少しでも少しでもあなたの時を過ごして欲しいから

カッ カッ

カッ

カ

カ

あなたの声で私の名前を呼ぶ声が聞こえた

暗い暗い部屋で私は独りになった

「がんばれ」(前書き)

ガンバレばきつとその壁を越えられる。
だから、「がんばれ」。

「がんばれ」

「がんばれ」

この一言しか言えない

「がんばれ」

この一言しか考えられない

でも

「がんばれ」

これから

戦にいくキミには

もしかしたら

似つかわしく無い言葉なのかもしれない

だって

私はキミじゃないんだから

キミの本当の気持ちはわからないんだ

キミの立場になって同じ心境になっても

それは

私の想像に過ぎないから

でも

「がんばれ」

この言葉しか口に出来ないよ

キミの立たされた境地に

この言葉は救われるのかな

わからないけど

「がんばれ」

これから戦いにいくキミが

私に見せた涙

それは齒痒い苦やし涙だろう

無念の涙なのかもしれない

私にはどうする事も出来ないけど

「がんばれ」

私も応援するから

「がんばれ」

もしかしたら

もっと違う慰めの言葉が欲しいのかもしれない

もしかしたら

もっと違う励ましの言葉が欲しいのかもしれない

でも私にはわからないから

「がんばれ」

どうかその試練に打ち勝って

だから

「がんばれ」

根拠はないけど

ガンバレば大丈夫だよ

だから

「がんばれ」

そして

また一緒に笑おう

それまで

「がんばれ」

「がんばれ」(後書き)

私の後輩に捧げる言葉。

雪化粧

空からゆつくりと舞い降りる私の思い
キミのそばに近づけるように
ゆつくりゆつくりと遠く離れた場所から
キミに会いに行くよ

キミを見つける事ができるのかな
キミは思い出してくれるのかな

少しでもキミに近づきたいから
少しでもキミの心に入りたいから

ゆつくりゆつくりと遠く離れた場所から
キミに会いに行くよ

時が経ちすぎたから
キミの記憶に私はどれくらいいるのだろう
思い出は色褪せてしまうから
キミはまだ私を思い出す事が出来るのかな

たとえキミを見つけたとしても
きっと私がキミに触れた瞬間に
私は消えてしまうだろう
私の小さな思いなど簡単に消えてしまうだろう

沢山の私の思いはキミを見つける事も出来ないかもしれない
沢山の私の思いにキミは気づきもしないのかもしれない
白く小さな私を見てもキミの心には何も感じる事が無いのかもしれ

ない

ゆつくり風に流されながら
ゆつくりキミの元へ近づく
ゆつくりキミの思い出に浸りながら
ゆつくりキミに会いに行く

キミと出会ったこの日に
私は雪となって
ゆつくりゆつくりと遠く離れた場所から
キミに会いに行くよ

一瞬で消えてしまう
儚い不揃いな雪だけど
この雪は私の思いの欠片
キミに思い出して欲しいから

キミと出会ったこの日に
私は雪となって
ゆつくりゆつくりと遠く離れた場所から
キミを探しに行くよ

キミはこの雪を見て
また私の事を思い出してくれるのだろうか
キミに触れれば消えてしまう
小さな私の思い
キミと出会ったこの日に
少しでも思い出して欲しいから
キミの前に舞い降りたい

消えてしまう雪みたいに
私の思い出もまた
消えてしまうだろう
キミの前で舞っている時だけでも
私を思い出して

儚い哀れな私の欠片
小さな小さな私の思いに
キミは気づいて

運命の人

今は私と君

傍から見れば仲の良い二人

君はとても優しい

君はとても楽しい

君が話してくれる言葉

君が夢見る私との将来^{さき}

傍から見ればきつと羨む二人

でも今となれば

私の気持ちの中にいるのは

昔別れた貴方

どうしても貴方が出てきてしまう

なぜだろう

なぜ貴方が不意に現れるのだろう

悪い事とは解っているけど

私は比べてしまう

君と貴方を

君には君の

貴方には貴方の

良い所悪い所が有るのに

寂しい夜には

貴方の温もりを

辛い時には

貴方といた時を

悲しい時には

貴方の笑顔を

何の躊躇も無く貴方が君より先に

私の心に現れる

どうしても私の気持ちは

貴方に向いてしまう

貴方と離れたのは私が選んだ事

君と一緒に成ったのは私が望んだ事

心は素直

きつと後悔しているのだろう

私の知らない所で私は道を間違えた

今更どうする事も出来ないのだから

余計に貴方が私の心に入ってくる

君がいるから尚更に……

先は私と貴方

もう一緒になる事の無い二人

貴方に会いたい

貴方に触れたい

私の素直な心の答え

今思えば運命の人

もしあの時に気づく事が出来ていたのなら

今の私は今より幸せだったのかな

貴方はこの同じ空の下

今何をしているの

私の事なんて忘れてしまったよね

私にまた逢いたいなんて微塵も

思ってもいないよね

私の運命の人は貴方

それにやっと気づきました

貴方の運命の人は私

ではなかった事も……

貴方の運命の人は誰なのだろう

もう出会っているのかな

もう一緒にいるのですか

心は私と貴方

いつまでも私の心に

貴方が一緒にいます

君といても

私の運命の人は貴方なのだから

ずっと一緒に

まだ誰も歩いていないこの雪の上を

君と二人で歩いてゆく

振り返れば

同じ歩幅の私と君の足跡

ゆつくりと歩いてきた二人

時にはささいな喧嘩をして

涙を流したこともあった

けど

君とだから私は喧嘩にも耐えれたんだ

凍えるように外は寒いけど

君とくっついて歩くと

暖かい

たまに立ち止まったりしたけど

お互い待ちあいあつて

また二人は歩き出す

ギュッ ギュッ

雪が奏でる二人の足音

二人だけに聞こえる

歩んできた証

冷えた空気は夜空の星を

綺麗に描いてくれた

いつもよりはつきり

星は見えた

二人の未来も

きつと

この澄んだ星空のように

見えているね

君の手を繋いで

君のポケットに二人の手を入れた

二人で一つ

これからも

ずっと一緒だから

ギュッ ギュッ

雪が導き出すその音は

二人だけに見える

永遠の白い道

寒いせいなのかお互いの頬は

赤らんでくる

きつと寒いから

そうしておこう

永遠なんてものが無いのは

わかってはいるけど

せめて

1000年は続くと良いな

二人の未来

まだまだ続くこの綺麗な白銀の雪

周りは暗くなろうとも

僅かな光があれば白く輝く雪の上を

二人は歩いていく

この先も

私はまた涙を流すだろう

でも

この寒さが涙を凍らせてしまう

私の涙は君と二人なら

涙では無くなるから

ずっとこの繋いだ手は離さない

繋いだ手を離すと寒いから

この寒さには耐えられないから

だから離さないよ

だって

ずっとずっと一緒だから

ふと

振り返れば

同じ歩幅の二人の足跡

ふと

前を見れば

二人の歩いていく道が見える

これからも

誰も歩いていないこの雪の上を

君と二人ずっと一緒に

歩いてゆく

ず
ん

ず
ん
.....

あなたとタバコと私と

何気に寂しい夜には

あなたが恋しい

未練はたらたらだけど

私は一人だから

誰にも内緒であなたを思い出すんだ

あなたが吸っていたタバコ

夜一人でコンビニまで買いに行く

私は吸わないんだけど

寂しい私の為に

あなたが忘れていったジッポで

あなたが吸っていたタバコに火をつける

あなたの吸い方を真似して

最初の一吸いだけをして灰皿に優しく置く

ジッポで火を点けた甘いオイルの香り

タバコから静かに立ち上る煙を眺めるだけで

私はあなたを鮮明に思い出す

部屋はタバコ臭くなってしまうけど

これがあなたの香りだから

ただ自由に天井に立ち上っていく煙りを

瞬きもしないでジッと黙って見ているだけ

それだけで私はあなたにまた逢えるんだ

何気に寂しい夜には

あなたを思い出す

過去にすがってしまつと

前にはすすめないけど

私の傍には誰もいてくれないから

タバコの香りと煙は

いつの間にか無くなっていた

灰皿にはフィルターだけが残っている

タバコの葉はあなたで

思い出の香りを残し

煙のように消えたあなた

最後に残ってしまったのは

惨めなフィルター

それは私だね

今の私ならきつとあなたと上手くやっていけるのに

どうしてあの時気づけなかったのかな

今ならわかるのに

あなたの優しさにどれだけ包まれていたか

あなたがいなくなるなんて

考えもしなかった

失くしたモノ

* 失ったもの *

安らぎを与えてくれたその笑顔を

私は思い出したよ

私が私でいられた時間

それを取り戻す事はもう出来ないのかな

少しだけ遠い記憶の中に映し出される

素直な私はいま何処にいるの？

偽りの笑顔と薄い同情しか出来ない

今の私は誰？

その笑顔がなければ私は

この暗い世界を真っ直ぐには道を歩けない

一人がこんなにも怖いとは思いましなかった

ただ強がっていた自分にやっと気づいた

私がこんなにも弱かったなんて

その笑顔を失ってからやっと気づいたよ

優しさを教えてくれたその笑顔に

私は忘れかけていた

私が私ではなくなった瞬間

それはその笑顔を失った時なんだ

幸せすぎて自分を見失っていたんだね

私の笑顔はいま何処にいるの？

大切なものを失くしたその意味に

気づかせてくれたあの笑顔

私がまた私でいられるように

笑顔を見つけに行く

本当の自分をまた見つけるんだ

* ぽっかり忘れた物 *

ぽっかりと空いた心

どこへ忘れてきた

ぽっかりと空いた部分

その心には何があつたのだろう

どこかへ忘れてきたから思い出せない

きつと辛い事悲しい事だろう

ぽっかりと空いた心

変わりに何を入れよう

ぽっかりと空いた部分

何が欲しい？ 楽しい事か？ 嬉しい事か？

まあ それも良い

でも失くすなよ

うっかり失くすなよ

本当の「意味」だけは

それだけは心に忘れるな

雪の花弁

師走の月になると愛しいキミを思い出す

キミと初めて出会った月だから

白い小さな雪が舞い降りてきた

まるで花弁のような牡丹雪

無意識のうちに両手で雪の花を優しく包む

雪が好きだったキミ

今はどこにいるのですか？

私の掌の中で消えた雪の花

「雪はすぐに消えてしまっから雪が好きなんだ」

キミの言葉が甦る

こんなに沢山の雪の花が舞っていても

こんなに沢山の雪の花で埋め尽くされても

いつかは溶けて無くなってしまっ

そんな儚い雪がキミの好きな理由

ただ静かに深々と雪が舞い降りる

この雪の花が見えていますか？

キミの好きな雪が今降っているよ

灰色の空を見上げ無数の雪の花弁が風に流れる

一片の雪の花が私の顔に触れた

冷たいけどそれはどこか暖かい

やっと会いに来てくれたんだね

雪が消えてしまう春の頃

この儚い雪と同じように

キミも消えてしまったから……

今は私の傍にいますか？

暖かい雪の花が頬に触れる

私は涙が零れた

また師走の月にキミに出会えた

ような気がしたから……

流れ星に願いを込めて

キミと来ていたこの場所

キミと私だけの思い出の場所で

良く二人で見えていたこの夜空

光り輝く星を一つ一つ数えていたね

綺麗な星空はいつも変わらず

キミと私を向かえてくれた

華麗な月はたまに姿を変え

キミと私を照らしてくれた

「いつまでもこの時間が続いてとください」と

時折流れ落ちる星に願いをたくしていたのに

キミの小さな悩みも私は気づく事も出来ないで

いつもキミだけで解決していた事も気づかないで

私の大きな悩みまでキミの預けてしまった

知らないうちにキミを傷つけてしまっていたね

私の気持ちなんてもうキミには届かない

そんな事はもう解っている

けど……

キミと来ていたこの場所に

キミと作ったこの思い出の場所に

今は一人で見ているこの夜空

光り輝く星を一つ一つ数えても

綺麗な星空はあの時と変わらず

一人では数え切れなくて

華麗な月はキミの姿に変え

キミとの距離を教えてくれた

こんな日が来るとは思わなかったから

時折落ちる流れ星にまた願いをたくす

「私の気持ちがキミに届くように」と……

人を愛するということの意味が初めてわかったから

優しい嘘

面白くもないドラマみたいな展開なんていらぬ

ありそうでなさそうな事なんて起こらなければ良いのに

キミが吐いた嘘

僕の事を考えての嘘

キミからしてみれば優しい嘘

その気遣いが余計に心に刺さる

キミの行動を見ていればすぐにわかるよ

どのくらい一緒にいたと思っているの？

B級映画みたいな先の読める展開など詰らぬ

誰もが考えれそうなストーリーなんて見る価値にも値しぬ

友達が吐いた嘘

友情なんてありもしぬ

結局は自分自身の欲情の嘘

わかってしまうから余計に腹立たしい

一番の親友だと僕は思っていたのに

優しい嘘なんていない

嘘を吐くくらいなら正直に言っただけいい

キミ達の関係など前から知っているのに

そんな意味の無い嘘など吐かれてしまうと

僕の方が困ってしまう

悪気が無い事は解っているけど

解ってはいるけど

解ってしまったから

僕はあえて知らないフリをしよう

だからキミ達は好きなようにして

出来れば僕の前にはもう現れないで

僕がキミ達に吐いた

優しい嘘

「俺の事なんて気にしないでいいよ」

心にもない嘘

「二人仲良くね」

どうせキミ達には優しい嘘には聞こえないだろう

恋愛詩

こいのうた

恋をして 失恋して また恋をする

恋をした

この恋が私の最後の恋だと思った

この人が私の運命の人と思った

けどこの恋も終わりを迎えた

失恋をした

「大切な物は失ってから気づく」

そんな言葉はずっと昔から知っていた

けど改めて実感をした

また恋をする

一人では寂しいから人を好きになる

本当は好きでもない人にまた恋をする

けどその時は気づけない

失恋をする度にもう二度と恋はしないと心に決める

でも寂しいから次の恋を探す

失恋をする度に同じ過ちは繰り返さないと心に誓う

でもまた同じ過ちを繰り返す

失恋をする度に少しだけ大人になったと心で思う

でもそれは勘違いで子供のまま

本当に好きだった人は

本当に大切だった人は

もう過去の人でもう会うことはない

今だから思えること

「大切な物は失ってから気づく」

昔から知っていた言葉

けど

失わないと気づけない

気づいたところで

何も出来やしないのに

一人は寂しいから人は恋をする

あいのうた

キミに届くのならこの気持ちを歌にしよう

いつもいつもキミの事を考えてる

仕事をしている時もお風呂に入っている時も

私の頭の中はキミ一色

どうか気持ち悪くならないでね

そこまで惚れたのはキミのせいだから

こんなに人を好きになったのは初めてなんだ

大切なキミにこの気持ちを届けたい

私の愛の歌

私が泣いた時は怒ってても良いから私の視界に入る所において

私が笑った時は素敵その笑顔のままで私の傍で笑っていて

私が愛しい時は思うがままに朝まで私をギュッと抱いていて

恥ずかしくて照れくさくて

こんな気持ち口では言えないからキミはどうか悟って

キミに伝えたいこの気持ちを歌にしたから

キミが寝ている時にそっと耳元で囁くよ

私は頬を染めながら伝えるから

この愛の歌を

夢の中で聞いて

時の中で

時の中で

光より速い時の中で

キミと一緒にいれることがあるのなら

ボクは何度も愛の告白をしよう

それは一瞬の時であつても

キミが受け入れてくれるまで

そんなことあるわけないのに

そんな馬鹿なことを考える

キミのことが好きな故に

ただ もし仮に

時間より速い時の中で

キミと一緒にいれることがあるのなら

ボクは何度も愛を確かめ合っ

それは一瞬の時であつても

キミといられるのならそれで良いんだ

* 幸せ *

幸せって何だろう

幸せになりたいって思うけど

幸せって何だろう

お金がある事？

自由な時間がある事？

私にはわからない

わからないけど

きっと

大切な人の笑顔を作ってあげる事

大切な人の笑顔が見れた時

幸せになれると私は思う

こころの声

手と手

一人じゃ寂しいから

手を繋いで

何も言わなくても良いから

手を握って

キミに触れていると

私はそれだけで満足になれるから

一年後も寂しいから

手を繋いで

機嫌が悪くても良いから

手を握って

キミに触れていると

私はそれだけで幸せになれるから

お互い年をとっても

手を繋いで

私が旅立つ時は目を見て

手を握って

キミが触れてくれるのならば

私はそれだけでそれだけで

キミと歩んできて良かったと思うから

あなたをおもつきもち

こんなにキミを好きになってしまったのは

私のせいでしょうか

どうしようも無いくらいに

私の気持ちにはキミがいるよ

こんなにキミを愛してしまったのは

キミのせいでしょうか

ひとりになるのが不安になるくらい

キミの気持ちが知りたくなる

こんなに人を大切にしたいくなるのは

最初だけでしょうか

来年も同じような気持ちでいれるかな

そういうことを考えてしまうのは

自信がないだけでしょうか

赤い糸というものがあるのなら

それはキミであってほしい

でも運命の人なら

こんなにも切ない気持ちになるのでしょうか

ただ単に私が今まで

本気で人を好きになったことが

無いだけでしょうか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4398e/>

私詩言

2010年10月11日05時16分発行